

第9回教育委員会臨時会議事要録

詳細—教育部庶務課 電話03-3981-1141

附属機関又は 会議体の名称	教育委員会臨時会
事務局（担当 課）	教育部庶務課
開催日時	平成27年7月22日 午前9時
開催場所	教育センター
出席者	委員 菅谷 眞（委員長）、嶋田 由美（委員長職務代理者）、千馬 英雄、渡邊 靖彦、三田 一則（教育長）
	その他 教育部長、庶務課長、学務課長、学校施設課長、指導課長、教育センター所 長、統括指導主事、指導主事
	事務局 庶務課庶務係長、庶務課庶務係主事、指導課庶務係長、指導課庶務係主事
公開の可否	公開 傍聴人 18人
非公開・一部公 開の場合は、そ の理由	なし
会議次第	第37号議案 豊島区立学校教科用図書採択について（審議）
備考	会議開催時においては、他自治体等の採択に影響を及ぼすおそれがあるため 会社名を伏せて議論を行いました。本議事録においては実際の会社名に表記 を修正しています。

菅谷委員長)

ただいまから、第9回教育委員会臨時会を始めます。本日の署名は、千馬委員と渡邊委員にお願いします。本日は、傍聴の申し込みが15名いらっしゃいますが、傍聴を認めてよろしいでしょうか。

(委員全員了承)

<傍聴者入場>

菅谷委員長)

それでは、事務局より傍聴者の皆様へ注意事項をお伝えください。

<庶務課長 注意事項説明>

(1) 第37号議案 豊島区立学校教科用図書採択について (審議)

菅谷委員長)

ただいまから中学校教科用図書の審議を行います。配付資料の確認を事務局よりお願いいたします。

<指導課長 資料説明>

菅谷委員長)

次に、教育部長よりこれまでの経緯と本日の審議予定について説明していただきます。

<教育部長 資料説明>

菅谷委員長)

それでは、教科書の審議の方法について事務局から説明してもらいます。

<指導課長 資料説明>

菅谷委員長)

それでは、中学校理科についてご説明ください。

<統括指導主事 資料説明>

菅谷委員長)

それでは、これまでのご説明いただきました教科書につきまして20分の時間をとります。ご覧いただいた後、後ほどご意見、ご質問をお願いいたします。それでは、よろしくお願いたします。

<委員 選定図書閲覧>

菅谷委員長)

それでは、中学校理科についてのご意見、ご質問をお願いいたします。

嶋田委員)

では、先に述べさせていただきたいと思います。どの社も本当にきれいなカラー写真が入っているし、それぞれきちんとどういう過程で、どのように自分の考えを導いていくかというところがよくできていると思いました。こういう教科書を使ってきちんと勉強できれば、理科分野も十分に学習できるのではないかと思いますので、どのように提示するかということが次の狙いになるのかと思います。

その中で私自身は、一つの部門について少し関心を持って見たのですが、第1学年に配置されている大地のことのところで見ましたが、これだけ地震や火山活動が起こる中で、大地がどういう仕組みを持っているかを子どもたちがきちんと勉強し、それを自分たちの生活の中でどのように考えるかということがどのように生かされていくというので見せていただいたところ、それぞれありますが、例えば学校図書はプレートの関係のことをすごくダイナミックな写真と絵を使って一目瞭然でわかるように、プレートのひずみがどうなのかということがわかるようになっていきます。また他の社でもそのようにしていながら、さらに防災について、それをどのように意識付けるかというところで、そういうところが私自身の中で選ぶときの観点にしたいと思います。

それからもう一つは、統括指導主事の説明にもありましたが、例えば学校図書の、科学の中で学んだことをどうやってキャリア教育に生かすかという視点がすごくよくできていて、例えばそれが必ずしも研究者や科学者、気象予報士など、そのものを生かすことではなくて、学芸員のキャリアについたとしても、あるいは花屋についたとしても、あるいは水族館の飼育係になったとしてもこういうことで学んだことはすごく生かされるという中に、保育士になったとしても子どもたちにどうやって自分たちの身の回りの科学的な分野のことを教えられるかということ、そのように必ずしも理系だけに進む、理系だけに関心があるわけではない子どもたちにとっても、科学、理科を学ぶということがどういうことかを上手に持っていっていると思いました。

それから、教える内容が増えてくる中で、問題集にどのぐらい割くかによって、一つのトピックにどのぐらい深く教材を発展させられるかということが連動してくると思いました。例えば地震のところをとってみても少ない社では12ページぐらいしか割いていないのですが、多いところは20ページぐらいを割いています。写真が大きければそれで1ページとなってしまうかもしれないのですが、盛り込める内容というのは変わってくるので、そこも一つ判断の観点にしようと思っています。

最後に、一つだけ統括指導主事にお聞きしますが、本区の子どもたちにおいて、理科の劣る分野は、第一ですか、第二ですか。

統括指導主事)

本区の子どもたちの特徴としましては、科学的な思考、知識・理解、そういったもの全てにおいて課題があります。

過去3年間の区の学力調査結果を、どの分野が弱点なのかというところを調べてみたのですが、傾向として、学校によっても違いますので何とも言えませんが、区全体としましては第二分野の植物のところ为全国に比べてできていないようです。

第一分野につきましては、これも各学校で若干違いはありますが、電流、電気の部分と、光や音の部分の部分があまり定着していないようです。また、特に自然の分野につきましては、今年度も含めて過去3年間、非常に定着していないという現状です。

千馬委員)

統括指導主事から、今回の出された教科書は至れり尽くせりという話があり、私も見て、なるほどということで、具体的にどういうところが各社共通して力を入れているのかという点で、まず小から中への学習事項の関連が非常にわかりやすいと思いました。この分野は3年生にかかわって、この分野は5年生に、という箇所がありまして、どこもそれに似た形で小学校との関連をきちんと明確にしているなというのが1点目です。2点目は、動植物の観察あるいは実習、実験の視点が非常に丁寧で、写真資料も含めてこれだけ見れば本当に考えなくてできてしまうというぐらいに至れり尽くせりでした。それが良いか悪いかは別として、そういう提起をされています。

3点目は、学習内容の確認と整理、まとめが、それぞれの教科書が特色を持ってしっかり位置付けられているということで、なるほどということで見させていただきました。

私は、教科書を選ぶ視点として、そういうことを前提に、教科書を自分のものにできるかどうかという活用力が問題になってくると思います。活用力を高めるヒントを与えるまとめがどうであるかを、選定にあたっては大事にしたいです。

質問ですが、第一分野、第二分野について、2年以降は大体固定していますが、1年に限っては第一分野、第二分野が交換しても構わないというのは、これはその地区、その学校によって児童の実態、生徒の実態に合わせて進めていくためという意味で、そのように変わっているのでしょうか。

統括指導主事)

実態に合わせて単元の学習の順序を組み替えることを考慮しておりますので、第一分野が先だとか第二分野が先というように順序性は学習指導要領にも示されていません。

ただ、指導する側の実態として申し上げますと、例えば2年生、3年生が第一分野で先に勉強していると、実験室との兼ね合いから、1年生は第二分野をやります。各学校の今年度の指導計画を見ましたところ、第1学年が第二分野からスタートしている学校のほうが若干多い状況でございます。第一分野は全くやっていないかというところではなく、生徒の実態に合わせていて、実験室等の部分も含めてそのあたりは各学校が工夫してやっている状況です。

渡邊委員)

質問ですが、ほとんどの教科書の自然分野で、最初に植物の観察が出ていますが、実際の観察というのは各中学校で実際に行われているのですか。

統括指導主事)

実際に調査部会からも豊島区でこういった植物については観察しやすい、できるような教材が例示として出されているという報告がありますので、顕微鏡を使って観察するというようなことは行われております。

ただ、校外に出てというところまでは、なかなか時間数の限りがあるものですから、なかなか難しいという現状はあります。

4月当初、1年生は校内、校庭の敷地内が中心であります。クラスごとに回って、植物の観察をしております。

渡邊委員)

なぜそれを伺ったかという、理科や科学というのは現実に観察したり実験したりするというのはすごく重要なことだと思いますし、授業の中においてもそこにすごいウエートがあると思います。今回拝見させていただく教科書は本当にどの社も内容的に充実しているし、興味関心が湧くつくりをしているので、知識としてすごく良い材料になっていると思います。実際に自分がいろいろな中学校の授業参観を拝見させていただいて、特に理科の時間を見たとき、実験等がどう進んでいくのかというところで子どもたちの興味関心ってかなり分かれてくるように思いました。

それが先ほどもご報告があった学力の違いに結びついているのではないかという一つの視点がありますが、その中でいつも気になるのはレポート等を作る力がないことです。先生がそこに重点を置いて授業を進めていくと、今度はそこで学ぶことが薄くなってしまいます。ですからある程度レポートはこう書くとか、観察はこうするという題材を各社がいろんな切り口で書かれているので、こういうものが子どもたちの頭にインプット、または先生としても実験や観察をレポートしなさいと言うと比較的子どもとしては初めに来るのかと思います。大人もそうですが、わからないことに関していきなり報告書を出しなさいと言われても、何をどう書いていいのかわからないと思います。実際に実験して、実験のプロセスもメモをしているうちに結果が出てしまったら、そこから先の授業にはついていけません。そういうところが理科の課題だと思うので、あらかじめそういう方法がわかっている、または今日は記録だけをとっていても休み時間でも自分で十分まとめられるというような指導が行き届いている内容の教科書であると、より関心度が増すと思います。

実際問題、理科の時間は少ないです。実験は、私たちが子どもだったころに比べてかなり減っていると思うので、そういう意味では知識としての科学ということ进行学习していく上では、嶋田委員からもお話がありましたが、やっていることが自分たちの身の回りに生きて、観察していることが将来にも結びつくということがわかりやすくできている教科書が、子どもにとっては材料として非常に良いという視点で見させていただきました。レポートやグラフの描き方、特に一番気になったのは観察図というのがただの観察しましたではなくて、事細かく図まで示されている出版会社もありました。そういうもののほうが子どもにとっては学ぶ材料として良い教科書になると思って見させていただきました。

三田教育長)

私は、5つの角度から教科書を見ました。最初は、中学1年生と小学校との接続の関係で、特に理科のおもしろさに誘うような、感動とか関心を引き継ぐような構成になっているかどうかという点です。それから、理科というのは実験から考察をするところが非常に重要ですので、時間がどうであれ、単元構成がどうであれ、とにかく実験をしないような教科書であってはなりません。つまり、実験の取り組みはどうかという点です。また、科学

的な物の見方、考え方を最終的には育成するわけですから、理科を通して考える力がしっかりと身につけているか、単に知識を注入して整理されているというようなものでは、相変わらず何度そういう学習をしても理科に関心を持ってませんので、考える力をどう引き出していくかという点です。残念なのは、言語活動については、全部共通して足りていません。つまり、話し合いの活動をせずに自分で観察し考えるといっても、共同学習の場を設定して、そこで思考力を深めたり、あるいは発展的に広げたりという場が中学校には不足しています。そして、最終的にはノートです。ノートは、自分の科学的な物の見方、考え方の変容過程を見るために書くものです。知識を羅列するために書くものではありません。その感覚がどのように構成されているか、という点です。

東京書籍は写真と統計の評点がすばらしいです。写真は見てくれだという考え方は、私は違うと思います。私たちが子どものころは、カラー写真なんてありませんでした。教科書はすべて白黒か、2色で刷られているのが精いっぱい、カラー写真は高く教科書に載せられなかったです。今はどの教科書も全ページカラーです。カラーはやはりリアルですし、拡大しても物がよく見えるので、非常にすばらしいです。最初の開いたページも人間と大木はこんなに違うのかと感じました。こういう迫力はカラー写真でなければ表現できません。

ある教科書には、タンポポから宇宙を見たという写真のページがあり、宇宙観が変わります。写真のおもしろさとか視点の違いは、写真の魅力を本来教科書に生かしているということです。ただ、大事なのはそれが思考力を高めたり、興味関心を広げたりすることにつながるかという点では、やや課題があると思いました。

これからの学習は、何を学んだかも非常に重要ですが、それはもう時間がたつとすぐ陳腐なものに変わっていきます。特に科学技術は発展、変化が激しいです。そういう中でどのように学んだのかが、物の見方や考え方を追及していくときの力になるという点では大事になるのではないかと思います。

それに関して非常に感心したのは、学校図書が全学年、全単元の目的や授業の狙い・計画、実験観察と結果考察、そしてまとめと感想というように問題解決過程を丁寧に解明しています。全単元においてそれをやるのは難しいかもしれません。学年で力を入れ、問題解決過程に触れて、子どもたちに徹底的に科学的な思考過程を検証させることで、科学的な物の見方、考え方、そして自分の考えを、人の話を聞いて修正でき、高め合うことができると思います。それが可能となる授業に変えてもらいたいです。この教科書は、ここの部分が非常に良いと思いました。

それから、天文とエネルギーという分野を全社見ました。ここの教科書はエネルギーと保存の法則、エネルギーの効率化をきちんと解明した上で、科学が実生活や実社会にどう生かされていくか。今、エネルギー問題は深刻ですから、問題を避けないできちんと解明しているという点では、子どもたちも現実に関心して自然についてどう自分は見ているか、科学をどう捉えていくかという中で生かしていけたら良いという点で非常に促しを与える

ことができると思います。

また、ノート書き方も知識を羅列して整理している書き方ではなく、思考過程の段階を踏んで子どもがノートを丹念にとるといった事例があり、編集者が活字を並べたというわけではない取り組み方が非常に共感できると思いました。

次に啓林館です。啓林館は、生物の第二分野の導入で図鑑がきちんと描かれていて良いと思いました。残念なのは、豊島区にそういうフィールドがなく、何とかしなければいけないと思いますが、尾瀬に行って観察するとか、豊島の森が成熟してきたら生態系もしっかりしてくると思いますが、こういう場を子どもたちに提供してあげなきゃいけないと考えています。こういう教科書を実際使うとなれば、厳しいだろうと感じました。

天文の分野で共通して言えるのは、豊島区では観測がなかなかできないことです。東京のどの小学校も中学校もそうですが、観測できない場合にそれを補う教科書というのはこれが良いという点でも見せていただきました。

また、教科書があまりにもよくでき過ぎていて、たとえば注意しなければいけないことが赤で書かれているものがありました。赤で書いてあると、ああ、注意すれば良いと思っても注意しません。文章の中に注意しなければいけない言葉が潜んでいるから、探してみてもいいと思うと、子どもたちはそれを探して考えます。表現が子どもの思考の結果として規制するように、教材としてでき過ぎてしまっていて、結果として子どもは力がかからないのです。それが本区の学力の実態に表れていると思うので、問題解決過程の中で自分の見方、考え方を柔軟させていく指導をしっかりとしなければいけないし、活用していかなければなりません。

それと、学んだことをきちんと観察しノートに記録して、体験とその文字化ができるようにしていけないといけないと思いながら全て見せていただきました。

菅谷委員長)

皆さんからいろいろご意見をうかがって、非常に共感するところが、たくさんありました。どの教科書も内容は素晴らしいですが、手とり足とり過ぎではないかと、私も感じました。あまりに丁寧だと、ある意味で発展性がないのではないかという気もします。

私の個人的な感想ですが、教科書の内容が多過ぎると思います。これを授業で全てできるのでしょいか。実際に授業でどのようにやっているのか知りたいです。それぞれ自分の興味のある分野をグループをつかって実験を行うというような方法などが整っているのですか。

統括指導主事)

学校図書の2年生の66ページをご覧ください。今、委員長からお話があったとおり、非常に理科の教員も苦しんでおります。例えば、豊島区の子どもたちが苦手としている電流という部分を見ていただきますと、既習事項を確認しなければいけないということで、小学校の学習内容をもう一回おさらいしています。そしてさらに69ページには、問題提示にかかわる部分が出てきます。次のページでは、理科の用語や基本操作をもう一度確認

しなければなりません。

さらに次のページでは、小学校でも使っているものもあるかと思いますが、新しく出てきた器具をもう一度確認し、そして74ページで、話し合ってみようということで、問題や課題について予想させ、ようやく右側のページの実験にたどり着き、そして結果を書く、というように問題解決的な学習課程を踏んでいきます。委員長がおっしゃるとおり、2時間連続の授業やチームティーチングなどいろいろと工夫してやっていくわけです。一つのことをやるに当たって、いろいろな説明・解説をしたり、予想させたりということがありますので、状況としてはかなり厳しいですが、きちんとやっていくように教員は努力しています。理科の授業を実験室でやる際には、子どもたちが4人グループをつくり実験をしておりますので、学習課程はそれぞれまとまってやっていると捉えております。

指導課長)

1点、補足させていただきますが、今の理科の授業時数は、1年生が週3時間、2年生、3年生がそれぞれ週4時間です。学習指導要領の中に、学校や生徒の実態に応じて十分な観察や実験の時間、それから課題解決のために探究する時間などを設けるようにと明記されておりますので、知識をただ注入するだけ、用語の解説だけというような授業ではだめです。実感を伴った理解を深めるための実験、それから探究の時間を設けなければいけないことになっています。そういったことを十分踏まえた上で、本区でも授業展開をしておりますが、今後そういった面の指導の改善をさらに図っていきたいと考えているところで

三田教育長)

理科の場合、系統学習ですから、教科書そのものがというよりむしろ指導の方法といったところで、実験の仕方とか、器具の名前とか、観察の仕方などについては、小学校からしっかり積み上げていけば確認するだけで済むことです。そうであれば本来の実験にすぐに入れるわけですから、そういう意味ではこういう教科書は非常に使い勝手良くできていると、そういう趣旨で先ほどは申し上げました。それを授業の中で丁寧に全部取り上げるというのは、まず無理です。

ただ、理数離れが盛んに問題とされている割に、授業時数はこのままで良いかという点は、別の角度から議論していかなければなりませんし、教師や子どもたちにそれだけの負担をかけて、結果がわからないという姿を作っていて、それを改善しないのは、それはそれで問題です。私も課題があると思いますが、教科書採択ですので、この審議については使い方をもってどれがより教師の合理的な指導に生かせるかが大事な視点の一つだと思います。問題解決的な、探究的な活動が流されることなくやっていくことが原則でありますから、やるべきではないかと思います。

菅谷委員長)

教科書は、一つに児童生徒のためのものであり、もう一つに教師のためのものであります。子どもたちからの見方と、教師からの見方の両方を考えていかなければいけないと思

ます。

学校図書の教科書は、まとめの言葉がすごくわかりやすかったです。小学校からのつながりといったところのまとめが、大抵は簡略されているのですが、これは本質を突いているようなまとめ方をされていて印象に残りました。

量がすごく多く、全部できないのは私もよくわかりますが、理科離れをなくすために、授業の中で理科はおもしろいということをいかに伝えるかが一番大事で、そのための材料が教科書ですから、そういった意味では本当にどれも素晴らしい出来だと思っています。

大体議論も出尽くしたと思いますので、中学校理科の教科書について投票をお願いします。

<委員投票、確認>

菅谷委員長)

ただいま皆さまにご確認いただきましたとおり、過半数を超えるものがありましたので、理科についての審議を終了します。

ここで休憩をとります。10時35分に再開します。

(休憩)

菅谷委員長)

それでは、続きまして、中学校音楽（一般）についてご説明ください。

<指導課長 資料説明>

菅谷委員長)

それでは、今ご説明いただきました教科書について10分の時間をとりますので、ご覧いただき、後ほどご意見やご質問をお願いいたします。

<委員 選定図書閲覧>

菅谷委員長)

それでは、音楽（一般）についてのご意見やご質問をお願いいたします。

三田教育長)

質問があります。音楽の時間について、今検討しているのは歌の部分ですか。実際に行事等でも音楽は関わりがあると思いますが、歌と器楽を含めて週当たり何時間かなど、その辺の実態はどうなっていますか。

指導課長)

時数は1年生が年45時間で、週換算にすると1.3時間です。2年生と3年生は、年35時間で、週換算だと1時間です。その中で歌唱活動や器楽、創作が行われ、あわせて鑑賞の項目もあります。

学校行事に関連して、本区においては中学1年生で連合音楽会、2年生を対象に音楽鑑賞教室等々を実施しております。また、8校全校が合唱コンクールを全学年で行っておりまして、主に文化祭等の午後の発表の中で実施しているケースが多いです。時数の取り扱いにつきましては、合唱コンクール等は行事としてカウントをして、年間の時数を調整確

保している状況です。

三田教育長)

授業時数の問題で言うと、音楽や美術といった芸術・情操を扱う教科は、どちらかといえば肩身の狭い時数になってきています。週当たり1.3時間では、どうやってこなすのか、大変な苦勞だと思えますが、子どもたちが意欲的で人間関係も良いという学校にとって、音楽は不可欠な教科だと思います。合唱コンクールは全校でやっているということですが、それはとても良いことだし、本区では芸術劇場を使って鑑賞教室もやっています。これは非常に恵まれていると思いますが、教科書に掲載されている曲が合唱コンクールで実際に使用されているのか、それとも別の曲でやっているのか、その辺はいかがですか。

指導課長)

合唱コンクールに選ばれる曲については、教科書の中にある曲を活用するケース、あるいは各学校では副教材として歌集を私費で購入をしておりますので、その中からも選んでおります。

千馬委員)

教育出版と教育芸術社の特徴的なことを私なりに述べたいと思います。教育出版は、最初の導入のところで音楽家を選び、音楽への誘いといいますか、学ぶポイントが導入で示されていて、生徒にとってはある意味大きな目安になると思いました。

ほかにも、伝えよう、伝えてみようという、自分の音楽を通して学んだことの思いを大事にされていると感じます。それからオーケストラの楽器等も含めて写真を多様に使うことで、子どもたちの関心を高める手だてを講じているとも思います。

教育芸術社について、音楽学習マップというのでしょうか、歌唱と創作、鑑賞の全体像をイメージしてあって、これから音楽の勉強をしていくにあたっての心構えができ、音楽の基礎・基本が構造的に示されている点がおもしろく感じました。また、指揮の仕方とか歌い方について、具体的に載せてあります。これは使う先生方にとっても非常に有効だと思いますし、生徒にとっても非常に参考になります。

教育出版には楽典が掲載されていて、非常に丁寧に見やすい印象が残りました。音楽史も含めて教育芸術社の方が見やすかったとは思いますが、教育出版も含めそれぞれの良さがありますので、そこら辺を踏まえて選びたいと思います。

渡邊委員)

中学校ではリコーダーは使っていますか。

教育指導課長)

アルトリコーダーを使って学習いたします。

渡邊委員)

教育出版にはリコーダーの指運びの図がずっと載っていますが、教育芸術社にはそれが違うところに載っています。子どもたちの多くは指使いを苦勞するので、指運び図が載っていると演奏のときに非常に良いと感じました。

絵的にも教育出版のほうが非常に視覚に訴える作り方をされていて、関心が湧くと思います。教育芸術社を見ると年表のところで年代とともに曲名等も掲載されていますが、曲名はその時代、時代を表していると思うので、音楽、音を楽しむということから考えれば、曲目が知識として入っているのはとても良いと思います。

それから教育芸術社のほうは音楽の約束の記載があります。知識の詰め込みだけではないのは当然ですが、どうしてもテストというときには、判断基準としてそういう決まり事をしっかり理解しているかということも大変重要なことだと思います。子どもたちもそういうところを学ぶときには、一覧になって整理されているものがあるのは非常に学習しやすい感じを受けました。

また、音楽ですので、自分で歌ったり演奏したりすることも大事ですが、聴いて感想を伝えるとかという点では、批評文を書いて、自分が感じたことを人に伝えるという、これは音楽に限らず、区内でやっている言語活動につながっていく内容になっているので、その点で教育芸術社は活用しやすいと思いました。

嶋田委員)

時間数が限られた中で、かつ子どもたちを取り巻く音楽環境が多様になってきているところで、何を選択してどのようにするかは、とても大変なことだと思います。例えばオペラなどの大きな作品のどこの、どの要素を教えれば良いかということは、そこだけで全てを語れる部分というものはないですが、一番早く確実に、というところを先生が捉えて教科書を使わないと、ただただ聞かせるだけ、ただただ歌わせるだけの音楽活動になってしまうと思います。

そういう意味で、どのような要素をきちんと教えられるかという観点が盛り込まれているかというところを、私は判断の観点にさせていただきました。

音楽の学習は、これまでの日本、西洋から伝えられてきたものをどのように継承していくかということと、一方で、その中から自分自身の創造性をどのように高めるかということが大切だと思います。伝統的な文化をどうやって伝えるかということが、学習指導要領の中で大きくクローズアップされていることもあり、その辺はすごく一生懸命作られている感じがしました。一方で、創造性を高めるということが若干薄くなっているのではないかと思います。

教育出版は、これまでもありましたが、歌舞伎を体験するというところで、実際に歌舞伎を演じることはほとんど不可能なので、歌舞伎を歌舞伎たらしめているツケとか見得という要素を体験することで自分なりに体験し、鑑賞するときそういう観点から見られるというつくりになっているところがおもしろいと思いました。

教育芸術社は、長唄をきちんと歌うことで歌舞伎の音楽の長唄に対してもきちんと力を入れるという姿勢があって良いと思いました。

あとは先生が、この教科書にあるものをどうやって見取って、どこを押さえていくかということだと思います。そういうことでいうと、教育芸術社の、先ほど千馬委員がおっし

やった音楽学習マップというのは、今自分がどこの場において、それが他の領域とどのように関わっているかが、子どもも先生もきちんと見えると思います。これは教育芸術社のこれまでの編さん方式だと思いますが、そこが一つすぐれているところだと思います。

三田教育長)

限られた時間で、いかに音楽的な情操を高めていくかが非常に重要だと思います。日本が明治に音楽教育を取り入れる中で、当時は西洋に追い付け追い越せという考えが音楽教育の底流にあったため、日本の伝統的な音楽がどこかへ行ってしまったという傾向がありました。そういう中で日本の伝統的な音楽をしっかりと継承していかなくちゃいけませんでした。

例えば、海外では歌舞伎が有名ですが、日本では歌舞伎なんて見たことない、聞いたことないという子どもが圧倒的に多いです。そういう機会をどうやって増やしていくかということでは、様々な教科書に工夫がなされていると思います。

民謡という側面で見ると、教育出版も教育芸術社もソーラン節を取り上げています。子どもに自分の耳で聞いたソーラン節は、やや正調というか、言われているものに近いものを聞いてきました。昔は運動会でソーラン節を表現するといったことがありましたが、最近は快活なリズムで、子どもに受けが良いようです。日本はどちらかといえば馬子唄にしても民謡にしても二拍子の、農耕民族で培われてきた音楽が底流にあり、三拍子になるとなかなか難しいという特徴があります。教育出版もソーラン節について書いてはいますが、教育芸術社では即興的に作られたものによっていろいろな歌われ方がされていますというようなことが書かれていて、なるほどと思いながら見ていました。

例えばその他にも日本ではよく知られている八木節や江差追分は、聞いたことはあるものの歌うとなるとすごく難しいです。江差でいつも全国大会が行われるぐらいで、本当に素晴らしいです。私も高校のとき、音楽の先生が卒業の土産にと江差追分を歌ってくれて感動したことを覚えています。そういう日本の伝統的な庶民の歌として素晴らしいものは何だということで、教科指導のどこかで触れてもらいたいです。

私が以前にいた区では、区歌と言えば皆から反応があって歌ってくれたように、伝統的な歌も愛唱歌として国民の共用的なものとして培えること大事だと思います。

教育芸術社は、新しく入ってきた西洋音楽と和の文化を継承していけるような内容ということでは、教師が伝えやすく丁寧に書いている印象を持ちました。原点に忠実に、それから楽典も含まれているという点では教育出版が優れていると思いました。

菅谷委員長)

音楽というのは、一つは自分で楽しむ部分と、もう一つは鑑賞みたいな部分があると思います。音楽は本来皆が楽しいから歌うわけです。楽しいときに歌う、つまり自分の心の表現として音楽があるわけです。黙っていても本来的に感情の中には音楽があると思います。そういう音楽の側面の心の響きを力として、生徒にわかってもらえることが音楽の目的だと思います。

教育出版はオペラ音楽図鑑というものが出ていて、選曲を見ると若い人たちがよく歌うような曲もたくさん出ているようです。クラシックが少ないとも思いましたが、いずれにしても音楽は楽しむものだと思います。

選曲を見ると、私個人としては教育出版のほうが広がりがあると思いますが、古典とのバランスを見ると教育芸術社のほうが良いかと、少し迷うところです。

それでは、ここで中学校の音楽（一般）について投票をお願いしたいと思います。

＜委員投票、確認＞

菅谷委員長)

ただいま皆様にご確認いただきましたとおり、過半数を超えるものがありましたので、音楽（一般）についての審議を終了いたします。

続きまして、中学校音楽（器楽合奏）についてご説明をお願いします。

＜教育指導課長 資料説明＞

菅谷委員長)

今、ご説明いただきました教科書について10分の時間をとりますので、ご覧いただき、後ほどご意見、ご質問お願いいたします。それでは、よろしくをお願いします。

＜委員 選定図書閲覧＞

菅谷委員長)

それでは、中学校音楽（器楽合奏）についてご意見やご質問をお願いします。

嶋田委員)

教育出版と教育芸術社で総ページ数が110ページと91ページと、結構違います。

さらにページのつくりについて、教育芸術社は写真と写真の間に余裕があるのに比べ、教育出版は割ときちんと詰めている印象があり、ページ数も多い上にそういう紙面のつくりになっているので、内容的には教育出版のほうはすごく多岐にわたっています。いろいろな楽器のページなど、いろいろあると思います。深く広い内容になっているか、教科書としての見やすさなどは、一つの観点になると思います。

両方ともそれぞれ良さがあると思いますが、楽器がこれだけあってもできるわけではないので、どこをとるかによって先生はどちらが使いやすいかを考えなければならないと思いますが、今の中学生の特性を考えると、楽器でアンサンブルをするというよりは、限られた時間数の中で、例えばボディパーカッションとか太鼓を打つほうが、いろいろと学習に発展できる可能性があると思います。

そうした中で、教育芸術社には西洋的なリズムを打つ教材、あるいは太鼓を一、二時間の中で打てるような教材というものを掲載されているので、より現実的などころが見えるという印象を持ちました。

ただ、教育出版もリコーダーの扱いについてすごく丁寧にしているし、篠笛のところもきちんとそのつくりも含めて丁寧に説明しページ数も割いているので、捨てがたいという印象を持っています。

渡邊委員)

2社ともリコーダーからギターからお琴、三味線まで演奏できるよう、すごく丁寧な取り組みがなされていますが、現実的に、これをどこまでやるかがポイントになると思うので、そういう意味ではリコーダーが主になるだろうというのが率直な感想です。我々が子どものころには学校にお琴も三味線もあったし、授業ではなくとも、軽音楽の部活動で演奏することもありました。しかし最近ほとんど見られないぐらい、楽器を演奏することに対して生徒たちが関心を持っていない時代であると思うので、やはりまずはきちんと演奏ができ、自信をつけて、それをきっかけに子どもたちが演奏することを学習する、楽しんでいくということがすごく大事だと思います。そういう意味では先ほどの音楽（一般）の審議のときにも言いましたが、リコーダーもまずは指の運びが大事ですから、そういうことがよりきちんと説明されているのはどちらかという点を見させていただきました。

他の楽器に関しては、特に教育芸術社の場合いろいろな楽器をさわってみようとか、打ってみようとかというページがありました。8校ある中学校全てが同じ条件ではないですが、それぞれの学校に何らかの楽器があれば、音楽に関する興味関心も高まる一つの材料にはなるかもしれないし、今後、予算などの充実が図れていけば、全ての学校に配置することも無理ではないかもしれませんが、いろいろな楽器を配備してもらい、関心を高めってもらうことは大事だと思います。

雑司が谷御会式のユネスコの未来遺産登録が話題になっていて、あれも宗教ですが、音楽が関わっているわけです。日本の音楽に関する関心度を高めていくということになると、やはり日本の楽器も演奏できると思います。例えば太鼓が一番身近で、小学校では結構使われているので、中学校でも発展性を持って学習できる部分が十分あると思います。そういうところを重点的に説明している教科書のほうが、発展的な部分の学習について非常に期待できると思います。授業時間数が限られているわけですから、あれもこれもと盛り込むのは不可能ですし、子どもたちにとっても、何が焦点かわからなくなってくると思うので、できることの中で、自学自習としての教科書の使い勝手を視点に見させていただきました。

千馬委員)

教育出版と教育芸術社で共通して感じたのは、楽器の説明が楽器によってページ数が違い、丁寧に記されていたことです。とりわけ導入のリコーダーについては、教育芸術社の方が丁寧に作られている印象です。

先ほどの音楽（一般）もそうですが、学習マップや音楽の約束というのはどちらも共通していて、そこはすぐれた点だと思います。

それから、教育芸術社の打楽器についてのコーナーがありましたが、教育出版については目次を見てもそれがなかったかと思うので、そこが両社の違いの一つになると思います。打楽器演奏の様々な方法などが46ページから載っているのがユニークだと思いました。

三田教育長)

楽器演奏においては、子どもが楽器を身近に感じ使えて、いつでも皆で楽しめることが一番大事だと思います。私自身も中学校時代からギターをやっていて、高校時代にはバンドのクラブに所属し、3年間やり続けました。大学時代は自分で演奏を楽しんで、教師になってからもずっと楽しんできました。今でも時々ストレスがたまるとギターを弾いて楽しんでいます。高校を卒業するとき、顧問の先生から、君は随分ギターが好きだね、これからいろいろな職業に就くだろうが、自分の気に入った楽器は手離さず使っていけると良いね、と言われました。それを今でもその言葉を大事にしている、自分の生活の中で音楽をしようという気持ちでいますが、子どもたちが合奏をやったり、合唱コンクールの際に器楽を取り入れ音楽にアクセント付けたりといった楽しみ方をしたことがきっかけで、ずっと音楽に関わっていけるのではないかと思います。

身近なものでは、先ほども話が出ていたように、リコーダーや太鼓であればこの学校にもあって、身近に触れられる楽器です。本区では琴や三味線などの和楽器を各学校に配置して使っているのでも、触れる機会もあると思いますが、リコーダーなどと比べると頻度は下がるでしょう。そういう点では教育出版、教育芸術社どちらも丁寧に書いてあり、あとはどの程度有効に、使いやすい形になっているかという点で判断する必要があると思います。

それから、ギターの指使いについて、教育芸術社は絵図で描いてありますが、教育出版は写真が掲載されていて、指の立て方もよくわかります。そういう点について指摘させていただきます。

菅谷委員長)

今の若い人たちの中には、ギターを日常的によくやる人なんかはたくさんいると思いますが、琴や尺八などは、極端に言えば見る機会ですらないのではないかと思います。日本の伝統的な文化の一つとしてそういう器楽に接することは、こういうときしかない可能性もあります。そういった意味では教科書でこういったものを取り上げてもらい、それをきっかけに、興味を持って音楽の道へ行く人も中にはいらっしゃるのではないのでしょうか。

教育芸術社の見開きのページで、こういうものに対して興味を持ってもらえるような写真が掲載されていて印象に残りました。内容的にはどちらの教科書も本当に甲乙付けがたい気がしました。

三田教育長)

私の最後の学校現場では、小学1年生から6年生まで全員が和楽器の演奏をできるということで、4年生以上が、選抜隊ではなく全員参加で全国の音楽コンクールに出て最優秀賞をもらっている学校にいました。和楽器については、私も体験的に結構知っていますが、教育出版と教育芸術社それぞれが、和楽器に関しては尺八やお琴、三味線を掲載していて、そのなかでも教育芸術社には和楽器の縦書きの伝統的な楽譜が五線譜とともに出ていました。これを使って演奏するということは恐らく、子どもたちはなかなか難しく、

慣れた子どもにしかできない部分があると思います。表現の仕方は違いますが、同じ音が出せます。今は、和楽器の演奏家たちのなかにも、五線譜に直して和楽器を広げようという取り組みがされていますし、そういう意味では子どもたちに対して問題提起をし、単に五線譜で全部あらわすだけではない音楽もあるということを継承していかなければいけないと思いました。

菅谷委員長)

ご意見が出尽くしたと思いますので、中学校音楽（器楽合奏）について投票をお願いいたします。

<委員投票、確認>

菅谷委員長)

ただいま皆様にご確認いただきましたとおり、過半数を超えるものがありましたので、音楽（器楽合奏）についての審議を終了します。

以上で午前中の審議を終わります。審議結果の確認は、先ほど申しましたとおり8月26日、定例会において行います。午後1時より中学校社会地理的分野、地図、美術の審議を行います。

(休憩)

菅谷委員長)

これより午後の部を開会いたしますが、その前に、午後からの傍聴希望の申し込みが3人いらっしゃいます。お帰りになった方がいますので、傍聴が全員で11名になりますが、傍聴を認めてよろしいですか。

(委員全員了承)

<傍聴者入場>

菅谷委員長)

事務局より傍聴者の皆様へ注意事項をお伝えください。

<庶務課長 注意事項説明>

それでは、中学校社会、地理的分野についてご説明ください。

<指導課長 資料説明>

菅谷委員長)

今ご説明いただきました教科書について20分の時間をとります。ご覧いただき、後ほどご意見やご質問をお願いします。

<委員 選定図書閲覧>

菅谷委員長)

では、中学校社会、地理的分野についてのご意見やご質問をお願いいたします。

三田教育長)

質問ですが、先ほど指導課長から、領土問題についての現行の学習指導要領の解説編についての補足説明が文科省からあったことに基づく基準の改定があり、現行の教科書修正

が文科省に提出されたときに、基準に基づいてチェックを受けたとのことでした。事前情報では、チェックを受けるにあたって改善・訂正した会社もあると聞きましたが、そうした事実があったのですか。そして現在出されている教科書はその基準を全部クリアしているという認識で良いですか。

指導課長)

今ご審議いただいています4社の教科書は、いずれも基準をクリアしております。

報道等によれば、クリアできなくて再提出をしたというのは歴史的な分野だということでございます。

千馬委員)

学習指導要領の地理的な事象を基本に据えて、教科書会社がそれぞれ作っているわけですが、教育長からお話があったように、2014年の補足説明と基準の改定ということで、私は特に領土と自然災害に視点を当ててお話しさせていただきます。領土関係では4社とも北方領土と竹島、尖閣についての記述につきましても、現状についてきちんと精査された内容で報告されていると思いましたが、とりわけ、写真や歴史的資料等を踏まえながら記述されていますが、私は、見やすさという観点から、内容的な面も含め東京書籍と帝国書院、日本文教出版が少し印象に残りました。

自然災害では、東日本大震災を踏まえて、災害の学習をきちんと定着させたいという思いがあると思います。内容を精査してみると、日本文教出版の自然災害は10ページ近く示されていて非常に印象に残っています。生徒の興味関心という点からも、あるいはこれからの未来を見据えた現実的な対応という意味でも有効な教材になると感じます。

嶋田委員)

意見を述べる前に1点、質問があります。地理の分野では世界編と日本編を指導計画の中で振り替えることはあり得ますか。

指導課長)

まずは世界を学習した上で、日本について学ぶという順序で学習することになっています。

嶋田委員)

私はそれを踏まえて、世界の地域調査というものがどのように構成されているか、そして身近なところについての調査をどう生かしているかという観点で教科書を見ました。

例えば教育出版では南アジアを扱っていますが、少しざっくりしています。反対に、名古屋市を扱っている部分では、細かく丁寧に、数値を幾つも掲載しています。発表や地域に向けての発信というところまできちんとレポートが載っているため、流れとしては良いと思いますが、最初に世界を調べるときに手続きや研究の仕方などをもう少しやったほうが良いという印象も受けました。

東京書籍は、韓国の食文化という生徒にとって大変関心のあるところから、話を上手に持っていっている印象を受けました。また、身近な地域の調査では、地図上に防災を落と

し込んでいるところがあり、この時期に大切な視点であると思いました。

帝国書院では、世界の地域調査もテーマを設定して予想を立てて、資料や文献、インターネットで調べるといった手続きをきちんととっているように思いましたし、日本文教出版ではロシアというなかなか関心を持ちにくい地域を用いて、恐らく4社の中で最も調べ方の方法をきちんと掲載していると思います。地域を更に細かく調査していく手法やスキルを身に付けるのに良い構成の仕方だと思いました。

教育出版の最初にある、地理にアプローチという地図やグラフの読み取りに関する部分が大変わかりやすく作られていて、これから出てくる地図やグラフをこのように活用していけば良いのかと理解できる構成がとてもおもしろいと思って見させていただきました。(渡邊委員)

まず、各社共通的部分では、例えば東京書籍だと地理にアップ、教育出版だと地理にアプローチ、帝国書院・日本文教出版も同じようなスキルアップというコーナーを設けていて、それぞれ関心を引き出すような構成になっているのはとても勉強しやすいのではないかと感じました。

この教科を学んでいく方法については、世界や国内の地域調査の両方ともほぼ同じ手法をとっていて、それは各社共通だと思います。

進め方に関しては、やはり最初に全体像がつかめたほうがとても学習しやすいという印象があったので、その点では東京書籍などが良かったと思います。日本文教出版も調査のまとめ方まで丁寧に書いてあるので、ある種お手本的な学習ができますし、調査対象はそれぞれにかかわるので、生徒たちは自分たちで調査対象を決めて調べることから考えると、手法についてしっかり学習できることが、生徒にとっては非常に有意義なものになると感じました。

先ほどの文科省の補足説明でもありましたが、災害に関する部分について、帝国書院は日本でそういう自然災害が起こるのかを、日本の地形等も含めしっかりと説明されていて、だから地震が多いとか、津波も起こるとか書かれています。まず地理的な部分を説明した上で、災害の対策について書かれています。とても特徴があると思いました。

他の教科書については、地形に関してわずかに触れてあるものもありますが、日本は地震が多い国ですとしか書いていないものもあります。そういった点では、帝国書院がすばらしく、地理としての説明がしっかりなされている印象を受けました。

北方領土や尖閣諸島、竹島についてもそれぞれの教科書が本文できちんと触れているし、地図や年表形式でそれぞれの歴史がきちんと書かれていて、現時点での状況が学習できるような内容になっていますので、その辺ではあまり差はないと思いました。東京書籍だけ、北方領土や尖閣諸島の部分で、この地域にはこういうものがあるといった、地球上の場所としての説明がありました。これがあったほうが地理としておもしろく有意義だと思いました。

各社ともに現状がきちんと理解できる内容にはなっていますが、やはり地理なので、地

理的なことがしっかり書かれているほうが生徒には良いと思いました。

三田教育長)

私は6つの視点で各教科書を見ました。1点目は、東日本大震災以後どのように改定されたのか、つまり、どのように自然災害を記述しているかということを中心に見せていただきました。ハザードマップ等で津波に対する避難や対策を講じている記述が幾つかありましたが、日本文教出版が特によくできていたと思います。

それから、東日本大震災について多くのページを割いて記述しているのが、帝国書院と日本文教出版でした。特に日本文教出版は、釜石の津波てんでんこという非常に大切な視点をきちんと教訓化して、歴史的に学んできたことを、地理的な物の見方・考え方で見ていこうという視点が明確に現れていました。また、自助・共助・公助といった災害に対する私たちの基本的な視点が示されていたのも、とても参考になる記述だと思いました。

2点目は領土問題です。4社それぞれが領土問題に触れていますが、東京書籍は4ページ、教育出版は2ページ、帝国書院は4ページ、日本文教出版は4ページということで、ページが多いから良く、少ないから良くないという意味ではありませんが、どういう記述がなされているか拝見しました。

領土・領海とは何か、といった記述がしっかりなされているかどうかという観点で言うと、図示されているのが帝国書院と日本文教出版でした。特に一見してわかるという点で、日本文教出版のほうが良いと感じました。両方とも正確な記述をされているという点は共通していると思います。地図や写真、歴史的変遷を正確に記述しており、心象・印象がわかります。北方領土の歴史的変遷については、帝国書院がしっかり記述できていると思います。

それから両社は、北方四島がいまだ返還されておらず、日露首脳会談を行って交流をはかっているというような取り上げ方を行っています。また、竹島についても地図や写真、歴史的経緯をきちんと説明していました。帝国書院は、竹島には昔、間違いなく日本人が住んで漁業を営んでいた事実を写真で示して説明しています。社会科として、原典主義はとても大事であり、編集者がいろいろと書くだけではなく、原典を示すことで一目瞭然となります。そういう点では非常にすぐれた視点だと思います。

尖閣諸島については、地図、写真、歴史的経緯をきちんと示しているのは帝国書院と日本文教出版だと思います。領海に侵入している中国船を写真で捉えて記述しているのも両社ということで、今の直面している課題、領土問題について子どもたちが理解できるように、客観的な記述をしています。単に教え込むわけではなく、資料をきちんと提示して、子どもたちに領土問題とは何か、どうしなければならぬかを考えてもらうためには、そういう正確な記述が大事だと思います。

3点目は国旗・国歌についてです。国旗や国歌をどう扱うかは非常に重要な課題だと思います。日本の国旗の歴史、国旗や国歌法について原典にきちんと触れてあるのは、日本文教出版です。また、外国の国旗に対する扱いと、国旗と国歌の意味についてきちんと述

べているのは帝国書院です。いずれも大変見識のある編集をしていると思います。

それから、日本の環境問題というのは大変難しい局面にあると思っていて、教育出版は、沖縄や北九州市の海が回復してきれいになった取り組みの例を具体的に述べ、環境問題のあり方を示している点がとても感心しました。

帝国書院は、紀伊山地の林業を事例に、林業を興して水産資源を豊かにしていくという、森が漁場を育てるという視点が書かれていて、これも感心しました。

社会科は、学力調査の結果からも言われていますが、どちらかと言えば読み物になってしまっているという傾向があり、心配しています。そういう点で、世界の地理を学んだ後に世界を対象に事例を挙げ自分でレポートを書くことが、一つの大きな学習のまとめになると思います。世界や日本の地域のレポートをどう作るか、しっかりと問題意識を持って、それを解決するためにどういう資料を収集し、そこから判断してどんなことが言えるか、どんなことがわかったか、そしてそれに自分なりの考察を加えてプレゼンテーションをするといったプロセスを丹念に踏んでいるのも、帝国書院と日本文教出版だと思います。

こういう基本的な地理的な理解が、災害や農産物、特産物、そこから世界と貿易といった形に発展していくので、そうした考察がしっかりできているかどうかという点を見させていただきました。

菅谷委員長)

地理科目の中で最も大きな課題となっている領土の問題については、4社とも内容的には正しく記載されていると思います。

領土や領域といった言葉をきちんと示しているのは帝国書院で、日本文教出版もそれについて書いてあると思いました。

災害の問題については、全社が東日本大震災と阪神・淡路大震災の経験を生かしたというような形で掲載をしています。歴史に学ぶという姿勢が少し出てきているところが、注目する部分だと思いました。

国旗と国歌について、日本文教出版は日章旗の歴史についてわかりやすく書いてありました。帝国書院は、世界の地域調査の中では南アジアを選んでいて、なかなかユニークだと思いました。今の情勢を考えると、外国に目を向けたときに南アジアというのは欠かせない地域だろうと思います。

三田教育長)

理科の審議の際にも話題にしましたが、中学校ではどうしても言語活動が弱くなってしまいます。地理では地理読本になってしまっていて、つまらないです。せっかく問題解決的な学習を提起されていても、小学校で積み上げてきた力が中学校で生かされなければ、おもしろくないと思います。そういう意味では、言語活動をきちんと位置付けて、学習の時々言語活動に立ち返って読み取ってみようとか、言葉でまとめてみようなど、言語活動を媒体としながら地理的な物の見方や考え方を育てようとしているのは大事な視点であり、教育出版がそこを一貫して編集されていると思います。

菅谷委員長)

意見も出尽くしたと思いますので、中学校の社会の地理的分野について投票をお願いいたします。

<委員投票、確認>

菅谷委員長)

ただいま皆様にご確認いただきましたとおり、過半数を超えるものがありましたので、社会、地理分野についての審議を終了します。

それでは、中学校地図についてご説明ください。

<指導課長 資料説明>

菅谷委員長)

これまでご説明いただいた教科書につきまして10分間の時間をとりますので、ご覧いただき、後ほどご意見やご質問をお願いします。

<委員 選定図書閲覧>

菅谷委員長)

それではご審議いただきたいと思います。ご質問やご意見等をお願いいたします。

三田教育長)

弱視等も含めた視覚障害をもつ子どもたちに対する配慮はどうなっていますか。

指導課長)

調査委員会等ではいずれの地図もユニバーサルデザインに配慮した色使い等をしていきますから、特段これは使いづらいというような意見は上がってきません。

菅谷委員長)

今の教科書はユニバーサルデザインに対してすごく配慮していると思いますが、淡い色が少しわかりにくいときがあります。

渡邊委員)

日本の各地域の特徴を両社とも掲載していて、例えば東京書籍だと基本資料やテーマ資料など、分けて掲載してあってわかりやすいと思う反面、九州地方や四国、関西、関東などといったときに、各地域の特色はこれだという比較がもう少しあれば、さらにわかりやすいと思います。また、東京書籍は江戸時代初頭の大阪の町並みの地図が載っていて、帝国書院は時代が異なりますが、江戸時代の初期と後期の東京・大阪の地図が載っていました。昔と今の町並みを比較する上では両方載っているほうがわかりやすいと思いました。

それから、世界地図ではユーラシア大陸を見るとき、机のスペースの問題から横開きのまま見られたほうが使いやすいと思います。それは日本地図についても同じようなことが言えます。

あとは、都道府県の位置がわからない子どもは結構います。視覚的にわかりやすい地図という観点からだと、帝国書院の方が一目瞭然でわかると思います。また、領海に触れているのも帝国書院であり、地理などと関連して考えた場合にはこちらのほうがわかりやす

い印象を受けました。

三田教育長)

地図帳は、日常的にも使えるツールだと思います。地図帳でじっくり授業することはないと思いますが、授業中に地図帳を素早く検索できるかということから言うと、東京書籍のジャンプというのはすごくおもしろいです。ぱっと見て、関心・関連するページに、電子辞書みたいに検索して飛ぶことができます。あと、検索するときによく使うのは目次ですが、色分けについて東京書籍は3色で、帝国書院は2色です。検索機能の点で非常におもしろい取り組みをされていると思います。

それから、ワンストップで学習したいニーズがあると思います。何のページを見れば関連することが出ているという点では両社とも同じですが、私は特に帝国書院の修学旅行に関する部分で、街道の昔の図が出ていたり、現在の観光の図が出ていたりしていて、非常に有効に使えると思いました。

帝国書院の31・32ページに見開きで、アジア圏から日本列島を見た地図が掲載されています。大和朝廷の時代から日本海文化圏があって、アジアからの文化の伝播ということで、日本に非常に重大な影響を与えたという視点からこの地図を見ると、日本はこうやって見えるのかと子どもたちも新鮮に思えるはずです。いつも地図の上は北だから、北が上にあると子どもは誤解してしまい、大人でも方角ではなく上とか右、左と言う人がいますが、地図の見方を変えると、東西南北を意識できると思います。

東京書籍の19、20ページには、北極圏から見た地図が載っていますがおもしろいです。こういう見方をして、北極圏航路で飛行機に乗ったらこうやって飛ぶのかと、実感的に見えると思います。

それから、同緯度・同経度の同縮図、縮尺の地図のページでは、イベリア半島と日本の北海道が重なっています。それを見ると、ヨーロッパは結構広いと感じます。ヨーロッパ中心の地図で見ると、日本はいかに狭い領土の中いっぱい人が住んでいるかということがわかんと思います。

地図の機能的な問題や、検索事項と資料との関連がワンストップで入ってくるという点から、帝国書院のほうに力が入っている感じを受けましたが、いずれにしても両方ともよくできていて、2冊使って勉強すればより充実できるのではと思ってしまったほどです。

嶋田委員)

開いたページからいろいろな情報へリンクされていく仕掛けがすごく面白く、地図を見ることが楽しくなるよう作っていると思いましたし、データの豊富さに感心しましたが、本当に地図だけを見るのが好きな人間としては、データの多さに戸惑わされてしまうこともあると思いました。

ただの地図帳というだけではなく、様々なデータの資料集として、地理的分野だけではなく歴史的な部分でも使えると思うので、有効に活用されれば良いと感じました。

ただ視覚的な観点から、クリアさでは東京書籍と帝国書院にかなりの差がある気がしま

す。東京書籍はやわらかいですが、文字情報が読み取りにくいというか、文字がはっきり浮き立っていないので、全ての子どもたちのためにということを見ると、帝国書院のほうが読みやすいような気がします。

千馬委員)

私も本当に甲乙付けがたいという感想を持ちましたが、東京書籍は写真資料が豊富で、関心を引くには有効だと感じました。東京書籍の180ページに、お国自慢、特産物という項目がありますが、私が教える側だとすると結構役に立つ資料だと思いました。

帝国書院は、地図の見やすさに加えて田や畑、果樹園といった土地利用がきちんと位置付けられているので、これも教える側からすると非常に参考になりますし、子どもたちの理解につながると思います。また、巻末の統計資料が見やすいと思いました。

その辺りを踏まえて、どちらの地図帳にするか決めたいと思います。

菅谷委員長)

国の面積に関するデータがありますが、日本の面積は、竹島や尖閣諸島など全て合わせたものですか。

指導課長)

全て含んだ上での面積等を算出して計算しております。

菅谷委員長)

北方領土も含めてですか。

指導課長)

含めています。

菅谷委員長)

地図帳は見やすさがすごく大事だと思います。帝国書院の色合いは、非常に見やすく、文字情報がわかりやすいと思いますが、東京書籍も配置とか見方で非常に工夫されています。

三田教育長)

質問ですが、東京書籍の111ページに東京中心部という地図が掲載されています。その左下に新しいオリンピックスタジアムの完成予想図と、前の東京オリンピックのときに建設された日本武道館が載っています。今、設計し直すと報道されていますが、これを印刷するのは来年だとした場合、掲載内容の差し替えは可能ですか。完成予想図は恐らく変わるので、事実に基づいて教科書は出すべきだという観点から言えば、差し替える必要があると思います。

指導課長)

差し替えは可能です。

菅谷委員長)

大体議論も出尽くしたと思いますので、中学校地図について投票をお願いします。

<委員投票、確認>

菅谷委員長)

ただいま皆様にご確認いただきましたとおり、過半数を超えるものがありましたので、地図についての審議は終了します。

ここで少し休憩をとります。再開時間を15時15分としますので、よろしくお願ひします。

(休憩)

菅谷委員長)

これより教育委員会を再開します。それでは、中学校美術についてご説明ください。

<統括指導主事 資料説明>

菅谷委員長)

今ご説明いただきました教科書について10分の時間をとります。ご覧いただき、後ほどご意見やご質問お願ひいたします。

<委員 選定図書閲覧>

菅谷委員長)

それでは、中学校の美術についてのご意見やご質問をお願ひいたします。

三田教育長)

開隆堂と光村図書はそれぞれ2冊、日本文教出版が3冊ということで、冊数に違いがありますが、これには何か特色のようなものがありますか。

統括指導主事)

開隆堂、光村図書をご覧いただくとおわかりになるかと思いますが、2、3年生用の教科書のほうがページ数も多くなっています。

日本文教出版につきましては、上下巻ということで分けて、2年生、3年生で使い分けることが可能になると思います。調査部会からこの上下巻等2、3年生で1冊ということについては、指導の際にどちらがより良いというような意見は特には出ていませんでした。

三田教育長)

何故そんな質問したかという、開隆堂と光村図書の教科書は同じサイズです。それに対して日本文教出版の教科書は大きく、掲載作品の写真も非常に大きいです。まるで実物大で鑑賞できるような、迫力を伝えられる特性があると思います。1年生の教科書に掲載されている作品を見ると、最初は「種まく人」で、クレラー・ミュラー美術館にあるゴッホの絵で、とても迫力があります。それから、身近な人を見つめて、のところにルノアールの母子の絵がありますが、これは質感を感じられる点がとても良いと感じました。

光村図書の2年生に「風神雷神」が掲載されていますが、私は何度も実物を見に行っていて、良い作品だと思います。気になるのはアーサー・ビナードの詩が、この作品にあわせて掲載されていますが、これがかえって「風神雷神」規定してしまうのではないかと思います。「ゲルニカ」のページもそうです。パブロ・ピカソの「ゲルニカ」は第二次世界大戦の抵抗の中で、どうやって自分の表現を伝えていくかということの工夫によってでき

た作品で、時代の背景を背負って生まれた傑作なのです。それに対して同じページに掲載されている谷川俊太郎の詩「生きる」は素晴らしい詩ですが、「ゲルニカ」とは別々に鑑賞したほうが良いと思います。一緒に鑑賞することで美術的な価値を規定してしまい、子どもたちの自由な感性で絵を見たり考えたり、色合いや構図のすばらしさを学んだりする力を制約してしまわないか、気になっています。

日本文教出版では、例えば葛飾北斎の「富士山」や長谷川等伯のように日本国内や世界に大きな影響を与えた日本の美術というものが大きく掲載されていまして、子どもが自由に発想して感じ取れる構成になっています。有名な詩ではなく、学芸員や先生の補助的なコメントが掲載されているほうがむしろ良い気がしますし、非言語による視覚的な感覚を情操的に養っていくという点でも大事だと感じました。

千馬委員)

私は、中学校をスタートする1年生は特に大事な時期なので、それぞれの単元で学びのねらいの目標が示されていることが一つのポイントであると思いました。また、先生はマークを活用しながら授業を進めるとしていますが、この2点については3社共通していました。

それから、光村図書と日本文教出版は導入の部分で小・中のつながりを意識されている印象を受けましたし、美術史の年表についても、日本の資料が豊富だと感じました。日本の作品が年表の中に多く記されているというのは大事だなと思います。その辺りを踏まえて判断していきたいと考えています。

渡邊委員)

3社ともとてもきれいな写真を使っていて、視覚的には素晴らしい教科書になっていると思います。

鑑賞に力を入れていることと、これは美術ですから、実際に作品を作ることになると3社の対応の仕方がそれぞれ異なっているように感じました。光村図書は物を作るというか、作品を作ることに關しての教科書的な意味合いがあると思いました。区内の学校でもいろいろなポスター作品展への応募がかなりあり、現在は本当に絵を描くということだけが美術の表現ではなくて、ポスターを作るなど様々な表現の仕方がある中で、子どもたちが更に上を目指せるようなお手本・見本になるような作品が、この3社の教科書の中のどこにあるのかと思ひ見していました。

見本とするにしても、細かい説明があるほうが子どもたちにはわかりやすいと思います。現代のようにたくさんの情報があふれているなかで、それらをずっと取り入れてきている子どもたちからすればその多くがすでに新鮮ではないことがあるわけです。どちらかといえばこういう美術作品は、本当は生で見たほうが良いと思いますが、それは物理的に不可能です。ただ、教科書であっても原寸大で見られれば、細かなタッチなどがわかると思います。小さな写真だとどうしても細部までわかりませんので、そういう意味では大きい写真があって、かつ制作や発想の方法が細かく書かれているほうが良いと思います。現代の

美術は「美術作品」として制作されるということよりもむしろ、日常社会の中にあるものをいかにして自分なりにデザインしていくのが重要で、身の回りにあるものの美しさを自分で鑑賞していくことを意識した教科書が必要だと思います。

とても有名な絵だけの掲載ではないのは、そういうことだからだと思うので、その点から見ると、私は光村図書の教科書が他社とは違った色合いが出ているという印象を受けました。

嶋田委員)

私は、美術の時間数が音楽と同じように各学年45、35、36時間という中で、1時間で何ができるか、作品制作の途中で次週まで持ち越すことができるのかなど考えると、全てを網羅するのはなかなか難しいと思いました。そうしたときに、美術というのはやはり新しい美の世界と出合える時間であってほしいと感じます。

そういう意味で、3冊に分冊されている日本文教出版の教科書は絵も写真も大きくなり、なおかつ余白があって、子どもたちがいろいろ考えられる要素があると思います。ぎっちり詰めて、余白があることは大事で、かつその作品に対するコメントも邪魔にならない程度に載せられていて、それが鑑賞への一つの手がかりになってくれると良いという考えがあって、日本文教出版は本当に良いと思いました。ただ、技法や材料の説明や教育的配慮に関しては光村図書が若干優れている箇所もありますので、どちらを優先しようか思っているところです。

菅谷委員長)

どの出版社の教科書を見ても、印刷が非常にきれいですし、内容も良かったと思いますが、私は光村図書の「風神雷神」の写真に非常に迫力があると感じました。そばにアーサー・ビナードの詩が載っていることに違和感があるかもしれませんが、そういう組み合わせで子どもたちに関心を持たせられることもあるかと思います。こうやって見ると、日本の美術もなかなか良いと感じますが、美術の教科書は、やはり感動してもらうことが一番大事なのではないかと思います。そういった意味で言うと、写真がきれいに掲載されていて、内容も多岐にわたるほうが良いと思います。

また、美術には自分で物を描くということも含まれるわけですから、実技的な面では光村図書の内容がわかりやすかったと思いました。

資料的な側面から、中学生には少し難しいかもしれませんが、絵の鑑賞の参考みたいなものが加わると、もっと良いと思います。

以上のことから、私は光村図書の教科書が良いのではないかと思います。

他にご意見ございませんでしょうか。意見も出尽くしたようですので、美術について投票をお願いいたします。

<委員投票、確認>

菅谷委員長)

ただいま皆様にご確認いただきましたとおり、過半数を超えるものがありましたので、

美術についての審議を終了します。

本日の審議は以上といたします。審議結果の確認は、先ほど申しましたとおり、8月26日の定例会において行います。次回は、7月25日の午後1時から、中学校社会・公民的分野、歴史的分野の教科用図書審議を行いたいと思います。よろしくお願いいたします。

(午後4時30分 閉会)